三

鴨川は京の賀茂川と高野川に分かれるところを右に折れて、土州屋敷の脇を瓜生山に向かうと一乗寺村の下がり待つに辿りつく。

剣聖宮本武蔵が吉岡清十郎一門と決闘を果たした地だ。

夕暮れどき、磐音は東源之丞と円光寺という寺を探しながら、

（どうも宮本武蔵に縁のある旅だな）

と豊前の巌流島の黒い島影を思い出していた。

「東様、かようなところで軍鶏の試合が行われるのでうすか」

「そう聞いて参ったのだがな」

と首を傾げた。

今朝、西本願寺を出たところで東源之丞が訊いた。

「坂崎、そなたは百四十両を持参していると言ったな」

「はい」

「そいつを何倍かに増やす法ああれば乗るか」

それは、と言い淀んだが、奈緒を身請けするには五百両以上の金子が要るのだ。百四十両では、なんの役に発たないと思い直した。

「むろんそのような方策があれば」

「よし、薩摩屋敷におれの知り合いがおる。ちと相談して参るで、そなたは京見物なりなんなりしておれ」

源の丞は国詰になる前、江戸藩邸勤番、大阪屋敷勤番と長かった。西本願寺の親恵も薩摩の知り合いもそのときに得た知己らしい。

磐音を京の町に残すと源之丞は、大宮通りを北へと上がっていった。

磐音は仕方なしにぶらぶらと蔦屋に戻って源之丞の帰りを待った。源之丞が戻って来たのは、七つに近い刻限で、

「見つかった」

と言った。

「坂崎、そなたの路用を十両残して、百三十両をおれに預けろ」

「畏まりました」

磐音は持ち金から百三十両を抜き取って風呂敷に包み、源之丞に差し出した。

「そなたが持っていろ、話は道々いたす」

蔦屋を飛びだ出すと、源の丞は鴨川沿いに北へ上がり始めた。

「坂崎、世の中に何倍にも金が化ける方策はそうあるわけもない」

「そうでしょうな」

「京でそれができるとしたら、はやりの軍鶏の喧嘩位だそうだ」

「闘鶏ですか」

源之丞は闘鶏に金を賭けようというのか。

「いやか」

源之丞が足を止めた。

磐音も歩みを止めて源之丞を見た。

「いやもなにも」

もはや行動をしていた。

秋の陽が二人の左手、衣笠山の方角に落ちようとして、源之丞の顔を照らし付けた。

「東様、京では軍鶏の喧嘩に百三十両もの金を賭けるですか」

磐音は今ひとつ納得できないままに訊いた。

「近頃、京で賭け闘鶏が流行っていてな。金の亡者の坊主、商人、大名屋敷の御用人、公家なんぞが集まるそうだ、今宵の闘鶏もそのひとつだ。浜村左源太は、客種がいいんで、間違いなく一勝負に何百両もの大金が動くといっておる」

源之丞の薩摩屋敷の知り合いというのが浜村らしい。京には朝廷対策の溜めいに薩摩や土佐などの雄藩や御三家の屋敷があった。

「坂崎、薩摩屋敷に軍鶏を育てる名人の小者がおるそうじゃ。その者が薩摩から取り寄せた血統のよい番いの軍鶏から一羽の喧嘩軍鶏を育て上げた。この軍鶏は屋敷内の試しに圧倒的な勝ちを収めたそうな、不敗だというだ。こやつは、薩摩の御家流の東郷示現流にちなんで、一撃と名付けられた」

「…………」

「坂崎、心配いたすな。一撃の強さはまだ京には知られておらぬ。この軍鶏の一撃が今宵初めて試合に出る。客の大半が対戦相手に賭けよう。確実だと浜村が保証しおった」

豊後関前藩の城外れでも闘鶏は密かに行われていた。

藩士の中には軍鶏の飼育に熱心な者もいたから、磐音も若い時分に誘われ何度か見物したこともある。だが、関前の闘鶏は、せいぜい賭金が文単位で、一度の賭金が総額一両を超えることのない田舎闘鶏であった。

磐音の闘鶏の知識はそんなものだ。

「浜村左玄太の申すことじゃ、間違いあい。まあ、任せておけ」

と源之丞が胸を叩いた。

磐音は黙っていた。

「坂崎、軍鶏の喧嘩とそなたは思うかもしれぬ。だがな、一勝負一勝負に何百両、ときに千両を超える金が賭けられるそうだぞ」

「浜村様の話は確かでございましょうな」

磐音はあとには引けぬと思いつつも念を押した。

「あいつも朋輩から駆り集めた金を持ってくる。まず間違いはない」

と言った源之丞は、

「坂崎、博奕のことじゃ、十割はないぞ。いやなら、見物だけして戻ってもよい」

と念を押した。

「東様にお任せします」

琴平は、遊里から賭け事まで詳しかった。だが、磐音は遊びには全く疎かった。とにかくここまで来た以上、引くに引けなかった。なにより源之丞の必死の親切を無下に断ることはできなかった。

「おおっ、あれだな」

遠くの松林から大勢の人のざわめきと興奮した軍鶏の鳴き声が響いてきた。

野面の中で道が二岐に分かれ、ざわめきに従って二人は左手の道をとった。すると半丁も行かぬ内に手入れの悪い、小さな山門の前に出た。ここが円光寺らしい。

「よし」

と自分に気合をかける源之丞に磐音は、懐の包を渡した。

「ああ」

と言って受け取った源之丞は、肩を怒らせて山門を潜った。

御堂の裏手に闘鶏場が設けられていた。野天に三間ばかりの円形の試合場が、竹矢来と筵で六尺ほどの高さに組まれ、その外側にぐるりと階段状の客席が設けられていた。

闘鶏場にはあちこちに篝火が焚かれて、軍鶏と客の興奮を誘っていた。

勝負が終わったばかりのようで、虚脱と高揚の余韻に場内がしいーんとしていた。

二人はあたりを見回した。

賭場の周囲の松林には、出場する軍鶏たちの控えがあった。

二人は松林に向かった。

一晩で何十羽も戦うのか、地面に伏せられた竹籠がいくつもあって、その周りで飼育人が最後の世話をしたり、試合に出て傷ついた軍鶏の怪我の手当てをしたりしていた。

ここにも殺伐と興奮と虚脱が漂い、剣術の試合場の雰囲気と似ていなくもない。

「東どん、来やったな」

薩摩絣を着たいかつい男が東源之丞に声をかけた。

「参ったとも。一撃の調子はいかがじゃな」

「見ちくれんね、こん毛艶を」

浜村は、小者が小脇に抱いた軍鶏を差した。

軍鶏は江戸時代初期、海外との交流が許されていた時代にシャム国からもたらされた品種だ。闘争を好む性格ともたらされた国の名から、軍鶏と呼ぶ習わされてきた。

小者が抱えた一撃は、赤毛が混じった褐色の羽根に覆われた赤笹と呼ばれる種類で、骨格が太くたくましかった。

「東どん、見てみい、こん腰の張りば。脚も太かんどが」

確かに腰も脚も太かった。それに大きな頭から突き出された嘴が短く、ぐうっと湾曲して力強かった。さらに眼光鋭い光を放射して、磐音たちを威圧しようとしていた。

磐音は、軍鶏に熱中する人たちの気持ちも分からぬではないなと思って一撃の勇姿に見とれていた。

「おおっ、遅くなった。この者が豊後関前藩の次の世代を担う坂崎磐音じゃ。浜村どの、お見知りおきの上、昵懇にお引き回しくだされ」

と東源之丞が突然、磐音を浜村に紹介した。

「坂崎磐音と申します、よしなに」

「おおっ、聞っもした。大船に乗ったごち、万事心配いりもはん」

浜村は自信万万に言い切った。

「出番はまだでござるか」

「二番、あとにごわす。おはんらは見物に回いやんせ」

浜村に言われて、二人は竹と筵で作られた見物席に入った。

擂鉢状の見物席が試合場をぐるりと取り囲んでいた。

東源之丞と坂崎磐音は、偶然にも空いていた一番前の席に座った。

すぐそばに地の散った砂場が見えた。

試合場の東西から、頭に布袋がかけられた二羽の軍鶏が世話役の両手に抱えられて運び込まれ、場内がどよめいた。世話役にはそれぞれひとりずつ助っ人が付いていた。

立会行司の烏帽子の男が、

「東、龍風、西、蹴殺しにございます」

と叫び、胴元が砂場を回り始めた。すると客の公家が、

「麿は蹴殺しに五両！」

それがきっかけになって次から次へと金が胴元の腹掛けに入っていった。

場内は京言葉やお国訛りが飛び交い、騒然とした雰囲気になった。

どういう仕組みになっているのか、磐音には分からなかった。

浜村左玄太もやってきて源之丞の隣に座った。二人は場内を回る胴元とまだ布袋を被せられている軍鶏について話し合っている。

源之丞が磐音を振り向いた。

「サカ↑愛、蹴殺しはこのところ五連勝で勝ちは堅いと見られている。蹴殺しに賭けてけ殺しが勝てば、賭金の五割増やしの戻りじゃそうな。だがな、龍風は負けたり勝ったり、勝率は決してよくない。龍風が勝てば、三番戻りだ」

軍鶏以上に熱狂した客の手から丁銀やら小判やらが胴元の腹掛けに吸い込まれていった。

確かに一勝負で何百両にもなりそうだ。

磐音は、胴元が客から預かった賭金を空で覚えているらしいことに感心した。

「もうおまへんか」

立会行司が大声を張り上げ、鉦が鳴らされた。

場内は一転して静粛に落ちた。

「蹴殺し、いてかませ！」

「龍風、こんどは勝つ番どっせ」

祈るような声が響いた。

「東、龍風、西、蹴殺し！」

世話役二人が両手に抱えていた軍鶏を虚空に何度も振り上げた。まだ軍鶏のかしらにも布袋が被せられていた。

「まだまだ」

立会行司が互いの呼吸を見て助っ人に合図を送ると、二人の助っとが軍鶏のかしらに被せられていた布袋を剥ぎ取った。

こここっこ！

けっけっけ！

雄叫びが上がり、世話役が互いの軍鶏を突き上げるようにして放ち、立会行司の軍扇が翻った。

虚空に舞った二羽の軍鶏は、蹴爪を立てて絡み合った。

その瞬間、蹴殺しの右爪が龍風の目玉を一閃し、血が、

ばあっ

と松明の明かりに浮かび上がって散った。

「龍風、これからやで！」

「いてまえ、蹴殺し！」

客の悲鳴にも似た声が交錯した。

地面に舞い降りた二羽は再び互いの身体をぶつけて攻撃し合った。だが、先手を取られて龍風は、片目の視力を奪われ、狙いが絞りきれなかった。そのことを知った蹴殺しは、不自由になった目の側に回りこみ、連続した攻撃を繰り出した。巧妙な戦いに龍風の動きが鈍った。それでも軍鶏の本能で動き回り、反撃を仕掛けようとした。

世話役が声をからして己の軍鶏を鼓舞した。

だが、最初の打撃が勝敗を決していた。

龍風が哀しげな声を上げると後ろ向きになった。それでも蹴殺しは執拗に龍風をおった。

鉦が鳴らされ、

「蹴殺しの勝ちにございまする！」

という立会行司の声が響いた。

世話役が蹴殺しに賭けた客たちに五割増しの金を戻して回った。

磐音は興奮したり虚脱したりする場内を見回すと、源之丞に外の空気を吸ってくると断り、観客席を出た。

磐音は筵囲いの厠を見つけて小便をした。

軍鶏の悲鳴が聞こえた。

厠を出ると、目を潰された龍風が始末されるところだった。

磐音は直ぐに見物席に戻らず、円光寺の本堂前の階段でしばらく時を過ごした。

次の試合の勝負の声を本堂前で聞いたあと、席に戻った。すると東源之丞が、

「坂崎、どうするな」

と訊いてきた。

「むろんやります」

「よいのだな」

「念には及びませぬ」

場内に、一撃と大戦する軍鶏が入ってきた。

「土州屋敷の軍鶏じゃそうな」

なんと薩摩藩と土佐藩の対決になった。

「強いのですか」

「播磨はここのところ連戦連勝、向かうところ敵無しだそうじゃ。そのせいで一撃が勝てば、六倍は付く。百三十両をそっくり賭ければ、七百八十両だぞ。どうするな」

「どうするとはなんのことでございますか」

「半分ほど賭けて様子を見るか」

源之丞が小声で囁いた。

「どうせならそっくり参りましょう」

「いくか」

「いきましょう」

胴元が回り始めた。播磨に賭ける客が圧倒的だ。

「一撃にはだれもおられまへんのんか。勝負になりまへんがな」

と胴元の独りがぼやいたとき、浜村佐玄太と東玄之丞が、

「賭けもした」

「乗った！」

叫んでいた。

「一撃に五十両と、百と三十両にございますな。さすがに薩摩様やで、勝負はこうでのうてはいけませぬ」

胴元は受け手が見つかり、ほっとした声を上げた。

立会行司が二羽の間に入った。

「東、播磨、西、一撃。待ったなしにございます！」

世話役が両手に抱えた播磨と一撃を何度か虚空に振り上げた。

助っ人が頭の布袋を外すと立会行司が、

「勝負！」

と軍扇を振った。

先に松明の明かりが照らす虚空へ跳ね上がったのは、一撃だ。

遅れて播磨が世話役のてを離れた。

一撃は赤ざさの両の羽を大きく広げ、高々と飛翔すると、二丈もの高さに達した。

「なんやねんな、この飛び方は」

「薩摩の軍鶏はよう飛びよるで」

見物が沸き、

「軍鶏は飛びやおへん、蹴りや」

という声がさらに響いた。

一撃はくるみのような冠を立て、姿勢を直立に立てると、太い脚をお体の下に引き付けた。

曲がった嘴を振り立てた一撃が滑空に移った。

下から迎撃する格好になった土佐の播磨は、身体を反らすようにして薩摩の一撃の攻撃を迎え撃った。

一撃はまるで東郷示現流の技そのままに高みから襲いかかった。

体の下に引き付けられていた両脚が伸びて、蹴爪が播磨の目玉を狙って伸びていった。

「よかよか、薩摩ん一撃を目ん玉に見舞いない！」

浜村左玄太が砂場に半身を乗り出して叫んだ。

東源之丞も両手を振って、

「行け、一撃行け！」

と叫んでいた。

虚空から勢いをつけた一撃の攻撃の間合いを見透かしたゆに、播磨が伸びてきた蹴爪を避けて斜めに飛翔して躱した。

二羽はくるりと反転すると睨み合う間もなく走り出しながら虚空へと跳ねた。

今度はほとんど同じ高さだ。

赤ざさの一撃と漆黒の播磨が六尺の高みで絡み合った。

一撃は羽を縮めて勢いをつけ、再び太い脚を利した蹴りを敢行した。

それを見た播磨は、虚空に広げたままの羽を今一度使い、一撃の上空へと逃げつつ蹴りを躱し、嘴を一撃の首筋に、

さあっ

と振るった。

血が振り撒かれた。

「ああっ」

と源之丞が叫んだが、佐玄太が、

「こいからがまこっの勝負じゃっど！」

と叫んでいた。

だが磐音は、一撃が見る戦意を喪失したのを見て取った。

再び砂場に下りた一撃と播磨の勢いがまるで違った。

「土州、止めやで！」

「薩摩の息の根、止めたりな」

見物が沸いた。

二羽は三度虚空に舞い上がったが、播磨がすでに高みを占めて、攻撃を巧妙かつ効果的に一撃の目と羽に振るうと、地表に払い落とした。

「負けんど、薩摩ん軍鶏が負けちたまっか！」

浜村佐玄太の叫びは悲痛に響いた。

一撃は片目の視力を奪われ、羽を痛めつけられていた。それでも立ち上がって応戦しようとした。

勢いづいた播磨が間合いを見た。

そのとき、立会行司が、

「勝負あった！」

と叫び、竹籠が一撃に被せられ、播磨の攻撃から守られた。

東源之丞が磐音の傍らから立ち上がり、

「な、なんとしたことか」

と叫んでいた。

磐音はなぜか、

（これでいい）

と考えていた。

奈緒は軍鶏の喧嘩で得た金で身請けされたと知れば喜ぶまいと思ったからだ。

「東様、いい勝負にございました」

磐音のさばさばした声を源之丞がなんともすまなさそうに聞き、なにか言いかけてやめた。